
白庭

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白庭

【Nコード】

N2519N

【作者名】

川中流一

【あらすじ】

渴いている。渴いている。どこを見渡しても渴いた砂しか無い。咲く筈が無い。渴いた砂の地平線には渴いた夜の唯二重層。

あの時から渴望が治まらない。

——まだ見ぬ花をこの手に摘み取りたい。

あれ程心を安らげ、切なく揺さぶるものを——それはきっと、至上に美しいものに違いない。

＊縦書読推奨

動かなくなった人形を見て、思った。
二度と何をも愛することなどするものかと。



「父上」

視界に入らず気付かなかったが、立ち止ると四歳になった息子が足元から私を見上げていた。

「父上、母上を見舞ってあげて下さい」

妻によく似た整った面立ちの子だった。

「仕事に限りが着いたら行こう」

私はいつものようにそう言って、有無を言わず、四歳の子には届かない歩幅で歩き去った。

宮家から娶った正妻は体が弱かった。心配したが、肺を患う前に嫡子を一人産んでくれて良かった。臥せてからは顔も見えない。あの息子がいなければとうに顔も思い出せないだろう。

「母上」

幼くも落ち着いた声に、庭を見つめていた女は顔を向けた。
「父上はお仕事が終わרי次第にいらっしゃるそうです」

「そう：ではそれまでに体を良くして置かないといけませんね」

この屋敷には狭い八畳間。その中央に引かれた、白い蒲団に横たわった女は正座をして傍らにいる息子に微笑んだ。

「母上は…」

「どうしたの。言っているのですよ」

「母上は、何故父上と結婚されたのですか」

「……あの方にね、白い花束を贈られたの。とても美しく綺麗で——嬉しかった」

ほら、と言って白く折れそうなほど細い手で縁側の先の庭を指した。

「季節が変わったら、あそこに咲くわ」

「何の花ですか」

「季節が変わったら教えてあげる」

ふふ、と女は笑い、息子の瞳を見つめた。

「あなたの瞳は父上と同じ、強い意志を秘めた真の黒ですね：あの方を想い出します」

「——父上に似たくはありません」

「そんなことを言っているはいけませんよ。あなたの父上はとても御立派な方です。御自分を完全に律していらっしゃる」

瞳を閉じて、歌うような声で女は微笑みながら言った。

「守るものはとても大きくとても重くとても大切なもの——それを逃げ出さずに背負うのは、とても立派なことなのよ」

女はけほけほと咳をする。

「母上、もうお休みになられた方が宜しいではありませんか」

「大丈夫よ。まだ少しだけ——その戸棚を開けて、桐の箱を持ってきてくれるかしら」

利発気にきりとした柳眉の子は言われた通りにその小箱を傍らに持ってくる。

「開けてみて下さい」

それを開けると、繊細を想わせるように丁寧に物がひとつ納めら

れていた。

「扇子ですか」

「ええ、そうよ。…もうすぐあなたは五つになるわね」

「はい、母上」

「これは母からの祝いの品よ。受け取って頂戴」

彼は穏やかに微笑む母からそれに目を向けて、しかし膝に手を置いたままだった。

「何故これを今…」

「楽しみが待ち切れなかったの。母は何もあなたにしてあげることができなかったけど、これは私が随分こだわって造らせたものだから」

彼は白く細い手を包むように握った。

「ではお体が良くなったら、一緒に散歩をして下さい。母上の好きなお庭で」

「そうね、そうしましょう」

くすくすと嬉しそうに母親は微笑む。

「ねえ、早く受け取って下さいな」

「誕生日迄の楽しみにしてはいけませんか」

「そうね。けれど母は早く見たいのですよ、あなたがそれを懐に入れて元服する姿を」

「元服はまだまだずっと先のことですよ、母上」息子は可笑しそうに笑った。

「だって待ちきれないんですもの。ではこうしましょう、あなたの誕生日迄それを開いてはいけないわ。そうしたら楽しみを取って置けるでしょう」

「こっそり開いてしまったらどうするのです」

「それ程のことを我慢できないようでは父上のように立派な家主にはなれなせんよ」

「母上は自分で待ちきれないと言って置いて、俺には待たせるのですね」

「そうよ、私も誰かを待たせてみたいのですもの」

早雲が日にかかるようにほんの一瞬だけ息子の表情は曇ったが、それはすぐにかき消され彼は微笑んだ。

「――では受け取らせて頂きます。有難うございます、母上」

そう言って手を伸ばし、礼をすると懷に入れてみせる。

「ずっとずっと、肌身離さず持っていて下さい。母はずっといつもあなたを見えています」

心なしか不安気な色を浮かべて息子は母親を見つめ返した。

「なんだか今日の母上はおかしい」

「そうかしら。きっと具合がいいからだわ」

「そうですね、今日は咳も少ない――ですがもうお休みにならなくてはなりませんよ。俺はもう罷ります。母上は俺がいると寝つけなさそうですから」

「まあ。もうそんな生意気を言うようになったのですね」

「ええ。俺は父上よりも立派にこの家を務めあげます。だから母上、ずっと見ていて下さい。母上は男を見る目が無いようですから」
笑って四歳の子は立つ。

「誰に性格は似たのかしら、あの方も心開けばこういう方だったのかしら」

「おやすみなさい、母上――」



「仕事が終わったのですか、父上」

傍らに立った私に目を向けずに、息子は言った。瞳は棺桶の白い顔を見つめている。

「美しいでしょう」

息子はそれを見たまま微笑み、私はぞくりとした。今日でやっと

五つにしかないというのになんと妖艶な笑い方をするのだろう。
「昨夜――露の命が落ちる刹那はとても綺麗でしたよ。見せて差し上げたかった。――惜しむらくは、あなたの名を呼んでいなければもっと美しかったでしょうに」

くすくすと息子は笑った。妻も確かそんな笑い方だった。いつも微笑んでいた気がする――微笑み返すことは無かったが。だが似ている筈なのに同時に全く異質な笑いだとも思った。

息子は懷から小扇子を取りだしはらりと開いた。見つめて口元を上げると腰にも届かないところからこちらを見上げる。

「俺はあんたのようになって、あんたのようにはならない」

息を呑んでいると、もう一度くすりと笑いぱたりとそれを閉じて何も言わず背を向いた。

そうして去っていく小さな背姿に心落ち着かない気を遣って、もう一度棺桶に目を遣った。

どうして動かなくなっただけで初めて愛しくなるのだろうか。これは人の形の物。この世のあらゆる縛りから逃れた自由で無口な体。そうして初めて、愛することを許されるのだ。

しいんと誰もいなくなったその場所で、初めて女に口付けた。

女は相変わらず微笑んでいた。

成程確かに――美しかった。

そして男もそこを去り、誰もいなくなった。

白い白い白百合を敷き詰められた箱に人形だけが置かれてあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2519n/>

白庭

2011年3月9日18時11分発行